

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：31311

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12618

研究課題名（和文）原発災害後故郷を離れた高齢者のウェルビーイングー福島県浪江町の人々の復興支援ー

研究課題名（英文）Well-being of the elderly who left their hometown after the nuclear disaster

研究代表者

水田 恵三（Mizuta, Keizo）

尚綱学院大学・総合人間科学系・教授

研究者番号：70219632

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）： 原発事故という衝撃的な体験をしながらも、家族や地域への結びつきを大切にしている高齢者が多いことが分かった。また、浪江町への帰住者は2021年4月時点で1500人ほど（7%）であるといわれる。しかし、アンケート調査を見ると、浪江町以外に居住している人はその地への帰属感が少なく、浪江町に対する思いが強いこと、住民票を浪江町のままにしている人が多いこと、などが分かり、事情が許せば浪江町に戻りたいという人も多いことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会のイメージでは、原発被害者は、元の居住地から避難して、その地で定住する人がほとんどあるというものがある。しかし、実際は事情が許せば元の居住地に戻りたいと思っている人もいる。このコミュニティ重視の考え方は、帰住、帰郷の促進のみならず、将来的にはセーフティネットとしての故郷の可能性の研究にも貢献するであろう。

研究成果の概要（英文）： It turned out that there are many elderly people who value their ties to their families and communities while experiencing the shocking experience of the nuclear accident. In addition, it is said that the number of returnees to Namie Town is about 1,500 (7%) as of April 2021. However, according to the questionnaire survey, people living outside Namie Town have little sense of belonging to the area, have a strong feeling for Namie Town, and many people leave their resident card as Namie Town. It turned out that there are many people who want to return to Namie Town if circumstances permit.

研究分野：社会心理学

キーワード：原発災害 帰住 生きがい

## 原発災害後故郷を離れた人のウエルビーイング

### 1. 研究開始当初の背景

2011年の原発災害後、2017年の帰還開始をきっかけとして、浪江町に帰る人は帰り、帰らないことを決定した人は、彼の地で永住を決めている。しかし、いずれにせよ、人々はそれなりに生きがいを見いだして生活しており、それが何かを、探ることとした。

### 2. 研究の目的

本報告書は、2018年8月から12月にわたって、2011年の原発事故以来、浪江町から各地に避難され、その地に留まられているか、浪江にお戻りになっている方500名を対象に実施したものである。令和2年3月の支援打ち切りを目前にして浪江の方がどのようにお暮らしで、どのようにお考えかを尋ねたものである。

### 3. 研究の方法

浪江町に居住していて原発災害に合い、2014年時点で福島県内に居住している50歳以上の方600余名を対象に質問紙調査を実施したものである。

### 4. 研究成果

全体で46%の回答を得た

#### 問1 原発災害時の住所

地域	人数	地域	人数	帰還困難区域
権現堂	34	田尻	7	
高瀬	4	小野田	2	
幾世橋	3	苅宿	1	
北幾世橋	16	酒田	5	
棚塩	4	立野	7	
請戸	16	井出	10	
中浜	2	小丸	4	
両竹	1	大堀	5	
西台	8	酒井	3	
藤橋	4	末森	2	
川添	33	室原	3	
牛渡	4	津島	9	
樋渡	17	南津島	1	
谷津田	10	下津島	4	

多い。

#### 問2 震災前の地域への思い

浪江町へ 皆仲が良かった 何でも話し合った

地域への思い	件数
そう思う	998
少しそう思う	531
あまり思わない	176
そう思わない	51

浪江への思い 相互の仲の良さなどを支持する意見が多い。

#### 問3 現在のお住まいの形態

お住まいの形態	件数
自己所有	145
復興公営住宅	63
民間賃貸	11
実家など	3
その他	5

自己所有の方が多い。家を再建されたと思う。

#### 問 4 現在お住まいの地域

居住地	件数
本宮市	3
郡山市	6
福島県内	6
福島市	6
福島県外	7
二本松市	21
南相馬市	23
浪江町	64
いわき市	92

回答者は、いわき市、二本松市（復興住宅）、浪江町、南相馬市の方が多かった。

#### 問 11 生きがいを感じる時

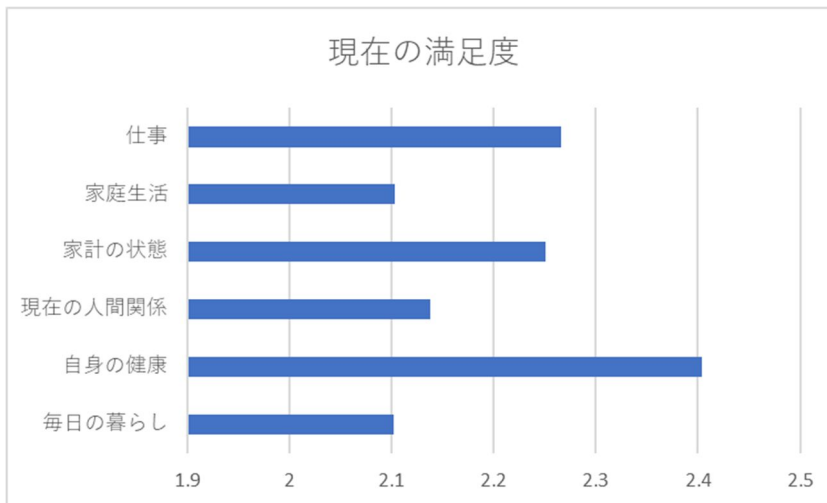
生きがいを感じる時	件数
12 その他（ ）	8
13 ない	15
11 若者と交流しているとき	25
3 現在の地域の人と集まっているとき	41
9 社会奉仕や地域活動をしているとき	40
10 よい作物(作品)ができたとき	45
7 仕事に打ち込んでいるとき	60
2 浪江の人々と集まっているとき	76
5 テレビやラジオ ネットなどを見たり聞いたりしているとき	86
6 旅行に行っているとき	86
8 おいしいものを食べているとき	89
4 趣味やスポーツに熱中しているとき	114
1 家族とのだんらんのとき	150

全体的に個人を中心とした生活に生きがいを見出している。

生きがいは 家族との団らんや趣味やスポーツなどが多い。

浪江の人との集まりも上位に位置されている。

#### 問 12 現在の満足度



2 がやや満足

3 がやや不満で

全体的にやや満足に寄っているが、健康状態はそれほどでもない。

### 問 13 現在の地域への満足度

現在の地域への満足度	人数
そう思う	308
少しそう思う	657
あまりそう思わない	621
そう思わない	172

この地域に帰ってくるとほっとするなど

そう思う 少しそう思うも 半数以上いるが

そう思わない あまりそう思わないが半数近くを占めている

### 問 17 今後のこと

今後のこと	人数
3 いずれ浪江町に戻るつもりだ	13
9 浪江町には戻らない	17
8 戻る戻らないに関係なくここは浪江にあり住まいは関係ない	20
7 福島県内（浪江町以外）には戻る（戻っている）	22
1 すでに浪江町（震災前に住んでいた家）に戻っている	26
6 どうしようか迷っている	28
2 震災前に住んでいた家ではないが浪江町に戻っている	39
4 自分たちは戻るが子どもたちは戻らないであろう	41
5 自分たちは戻らないが将来子どもたち（孫）には戻って欲しい	64

浪江の町にすでに戻っている、いずれ戻るつもりだが78名いる。どうしようか迷っているの28名を入れると100名を超える。

自分たちは戻らないが、子どもたちに戻って欲しいという人も多い。

一方戻らないという人は少ない

(全体まとめ)

今回の調査では、津島など帰還困難区域の人も回答頂いた。原発事故時のお住まいは、自宅が圧倒的に多かった。浪江には先祖代々100年から200年住んでいらっしゃり、50年以上お住まいの人が多し。震災前の浪江の暮らしや人々への思いが強い方が多い。その一方で避難先の地域への愛着は以前ほどではない。今回回答して下さった方の現住所は浪江町、いわき市、二本松市、南相馬市が多かった。現在周囲に助けてくれる人がいるかという問には8割以上の方がいると答えたが、14%はいないと答えていました。健康状態はおおむねよい、ややよいでしたが、悪い、非常に悪いも15%いた。生きがいを感じる時は家族との団らん、趣味やスポーツ、おいしいものを食べているときなどで浪江の人々と集まっているときもありました。現在の生活に対する満足はおおむねやや満足であったが、自身の健康はやや不満によっていた。原発災害後、浪江にある家を見に行っ方は8割近くおり、先祖の墓にも時々行っている、浪江での行事には行かない人も4分の1ほどいる一方で、広報なみえは必ず見る人が大半であった。また、浪江で親しかった人には4分の3が連絡を取っていたが、取らない人も4分の1おりました。住民票は移すつもりがない人、迷っている人が多い。今後は浪江に戻らないと表明している人は少ないが元の暮らしや将来には悲観的な人が多い。

生きがいとしては家族を含めた個人的なものに求めている中で、元の地域への結びつきを求め、その気持ちを失っていない点は、前回の我々の調査結果と一致している。

現在浪江に住んでいない人も将来的には浪江に戻りたいという気持ちを失っていないことも感じられる。

その一方で、浪江町に帰りたいが、すでに家を壊してしまっ帰る家がない人々が、そして避難先に自宅を購入した人が迷っている様子が伺えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 水田 恵三
2. 発表標題 コミュニティはレジリエンスとして機能するのか
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水田 恵三
2. 発表標題 復興曲線を用いた被災者の復興感に関する研究
3. 学会等名 日本地域安全学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田山 淳  (TAYAMA JUNN)  (10468324)	早稲田大学・人間科学学術院・准教授   (32689)	
研究分担者	藤本 吉則  (FUJIMOTO YOSHINORI)  (10757941)	尚絅学院大学・総合人間科学系・准教授   (31311)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------